
FAIRYTAIL ~氷の滅竜魔導師~ 改訂版

神雷鳳凰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F A I R Y T A I L ~ 氷の滅竜魔導師 ~ 改訂版

【Zコード】

Z4669Z

【作者名】

神雷鳳凰

【あらすじ】

ある日トラックに轢かれそうになつた女の子を守り代わりに轢かれて死んでしまつた主人公、秋川 真琴は、まだ死ぬ運命ではなかつた真琴をミスで殺してしまつたらしい、そして神に転生のチャンスを貰つた真琴は、エックス・ブラックシアと名前を変えF A I R Y T A I L の世界へと足を進めるのであつた…

プロローグ？

俺の名前は秋川 真琴高校1年生のビートでもいる男子生徒だ、今は下校中、さて今日は帰つたら何をしようかな？

そう考えていると田の前に交差点が見えてきた、見通しがよく、事故も少ないこの交差点は、車どおりが多く、今は帰宅ラッシュのためかいつもより車や、トラック、バイク、自転車、歩行者の通る数も多い、そして俺が田を別の方向に向けると轢かれそうな女の子が…って危ない！？

「間にあえええ！！！！！」

どういって飛び込むと女の子を歩道に突き飛ばした、しかし、俺に逃げる余地はなかつた…

ドシャツ

その音とともに俺の意識は暗転した

次に目を覚ますと俺は全体が白い部屋にいた
そう、窓も、天井もなく、壁があるかどうかよくわからない、た

だいえるのは、足元に青い魔法陣、簡単に言うと周りに魔法語？みたいなものがあり、周りには雷がうずめているると俺はある考えに至った

俺は死んだのか

それが一番の考え方だつた

そして俺は仰向けの体制から立ち上がった
すると奥のほうから白いローブをまとい、後ろから白い羽が生えて
いて、リングが頭についている女性がいた
俺はふとその人に話を聞くために移動した

「あのお、すいません」

「えっ！？まさかあなたが私がミスで殺してしまった人？」

「ハツ！？」

この時俺は驚愕した、俺が死んだのはどうやら神様のミスらしい
どうやらこの人が言うにはあの女の子は元々あそこで死ぬ運命だつ
たのだが、俺が助けてしまったために时空が歪み、運命が変わり俺
が殺されたそうだ

「それで俺はどうすればいいんですか？」

「はい、実はあなたはまだ死ぬ運命ではなかつたので地獄にも、天
国にも送れないでの、あなたには転生してもらわないといけないの
です」

「どこにですか？」

俺はこの展開を知ってるが、この後大体元の世界とこうどりでぎなくて、漫画やアニメ、ゲームの世界は〇〇Kといつ展開がテロップ的に決まってる
俺がそう思つてないと

「はい、具体的には漫画やゲームの世界に転生できますよ」

「そうですか…」

実際そういうわれても困る、行きたいところがありすぐには選べない
どうしよう… そういうえば、フェアリー・テイル妖精の尻尾の世界だったたりいかもな、
魔法を貰つて、原作キャラとかかわってみんなと仲良くなりたいし
… よしつ！… 決ましたぜ

「じゃあ、俺はフェアリー・テイル妖精の尻尾の世界に行きたいです」

「分かりました、それで魔法は何がいいですか？」

「じゃあ、氷の滅竜魔法と、氷の滅神魔法、そしてコピー魔法をく
ださい、それと失われた魔法のアーク系統とロストマジック妖精の法律とテン・ロウ
マンドメンツの剣型で」

「分かりました、ではあなたの転生後の世界で使う名前は？」

「エックス… ブラック… ギヤラクシー… ハックス・ブラクシア…
エックス・ブラクシアでいきます」

「分かりました、ではそこに立つてください」

「はい」

「では私のことを念話で呼ぶときはキュリアと頭の中で念じてください」

「はい」

「では、この世界に宿りし、火・水・風・草・光・闇・氷・雷・鉄のフォースよここに集いこの者に新たな人生を歩ませよ！！」

そう神様が唱えると足元の青い魔法陣が蒼く光り俺は光の中に消えて行つた

第1話 氷の竜 エターナル

「ぱぶぱぶぱーふふ（どうしてこうなった）」

さて俺ことエックスは、いま森に一人で放置されています
多分理由としては捨てられたのだろう、魔法も一つも覚えていない
し何もすることがない…そう思つていると

バサツ バサツ ドスンツ

といつ音がした、何の音だろ？

『こいつは人間の子供か？それにしても人間とは愚かなものだ、なぜ子供を捨てるのか…まあ良い、この子供は我が連れて行こう』

ほう、これが滅竜魔導師の誕生するまでの経緯か？

まあとにかく今後はこの竜の言つとおりに暮らせばいいはずだ

そして時は過ぎ10年後…

『我にもやめじよがある、だからもうひな別れだ』

「なんで？」

「どうか、わづかしく年々月日か

『我とは今日でお別れだ』

「ん？ どうしたの父ちゃん」

『ハックスよ』

「…分かつた」

さびしげ、いぐりなんでも

『その代わりと書いてはなんだが、この氷臨刀を下さる』

「ありがとうございます」

『元気に生きる、ヒックス』

「うん。」

そう返事を返すと父さんは飛んで行った
満足そうな顔で…

第2話 天竜の子とヒドラス王子～ヒクシードの誕生

ただいま俺はウェンティとミストガンが初めてであった回想シーンで出ていた森にいます
それにもしても

「ここは暑いな」

そう熱帯地域だ、まあ確かに氷の滅竜魔導師ドラゴンスレイヤーだが、体内に氷の魔力を持つていてもやっぱり暑いのには変わりない

「それにしてもどこだらう……誰だ……」

「君こそ誰だい？」

「俺はエックス、エックス・ブラックシア」

「僕はジョンラール、君はここでいつたい何してるので？」

「氷の竜エターナルを探している、この刀は形見だ」

「さうか、君も竜の子か、この子も竜の子だよ」

「……」

「無口だな」

「この子は引っ込み思案なようですね」

「やうなのが、よりしくな、えーっと」

「……ウーンティイ」

「ん？ そつかよろしくなウーンティイ」

「……うん」

なるほど、このあたりではモジモジラールとウーンティイは一緒に行動しているのか

「とこりで、エックスはどうに行くつもりなんだい？」

「俺は妖精の尻尾フタリーティルに行くつもりだよ」

「やうか……じゃあおわか……何か来る……」

「……何が来るの？」

「俺がやる……《チャキッ》一人は離れて」

「あ、ああ」

「……うん」

そう言葉を交えると来たのはラクリマジロ、厄介な相手だがそこまで厄介ではない！！

「行くぞ……」

「グオオオオオオオオオ」

相手の雄たけびと同時に奴は攻撃に転じた

「転がりか…ならば！」

そういうと俺は息を吸つて

「氷竜の……咆哮！..」

ズゴオオオオオオオオ
といふものすごい音を立て俺の魔法はラクリマジロに激突した
すると

「ゴオオオオオオオオ…『ドサリッ』」

ラクリマジロは鈍い音を立てて倒れた

「刀を使つまでもなかつたな『チヤキッ』」

そして俺はそうつぶやくと刀を鞘にしました

s.i.d.e out

s.i.d.eウーンディ

最初はコワそうな人だつたけど
エックスさんかっこいいな
でも妖精の尻尾フエアリー・テイルに行くつて言つていたし
まあ旅の中で、ギルドに連れて行ってくれるつて言つてたし、入つた
ら、聞いてみよう

side out

side エックス

「じゃあ俺はそろそろ行くから

「ああ元氣でな

「またあえたらいいですね

「そうだね」

そう話し俺はその場を去つた

俺はウエンディとミストガソと別れた後、歩き続け、東の森にたどりついた

「もうすぐで妖精の尻尾フェアリー・テイルにつくな」

「う」ココは東の森の中でも妖精の尻尾フェアリー・テイルに近い側もつすぐで着く

「かわいい夜になるし、そろそろ木に登って寝るか…」

そつづぶやき、木に登るとエクシードの卵らしきものがあった

「これはエクシードの卵か？原作のハッピーの卵とは模様が違うし、しかももうすぐ生まれそうだ」

そう、その卵はもうひびが入っていてあと一時間ほどで生まれそうだ
そう思つてみると

ピキッ

とこゝ音がした

「んへ、この音はまさか！」

そう思つてみると卵が割れ猫が生まれた

第3話 火の竜の子との決闘

今俺は、フェアリーテイル妖精の尻尾に向けて、この前生まれたばかりの猫の雄レイと一緒に歩いています

「ねえ、エックス」

「ん? ディレしたレイ」

「あのね、フェアリーテイル妖精の尻尾ってどんなギルドなのかなあって思って」

「さあな、俺も今から楽しみだ」

「ルー! ! !」

ちなみにレイは俺の相棒の猫で、口癖は《ルー》よく返事で《ルー! ! !》と言つてゐるからである

まあ見た目はハッピーの灰色版と思つてくれればいい

そういう考えて、いふうちにフェアリーテイル妖精の尻尾のギルドが見えてきた

「なあレイ」

「なに?」

「もし」との先、俺が迷つたり、死にそつになつたりしても、一緒に来てくれるか?」

「ルー! ! ! もちろんだよ! ! !」

「さうか、ありがと」

そう会話を交えて俺とレイはギルドの扉を開けはいって行った
すると中では、『見ない顔だな』や『今度こそまともなガキが来た
んじゃね?』のか?』とか聞こえる

はつきり言つてこのギルドがどんなところなのか改めて分かつてき
た
そう思つていると向こう側から赤い髪をした女の子が來た

「貴様は誰だ?」

「俺はエックス、こっちは相棒のレイ」

「ルー!!--」

「そりが、私はエルザだ、よろしく頼む」

「ルーラルアーヴィング」

「で、貴様はここに何の用だ?」

「おう、このギルドに入りたくて、歩いてここまで來た」

「さうか、マスター!!--」のギルドに入りたいそうです

「そりが、今行くぞい」

そういうて立ち上がったのはマスターだ

「おぬしか?」のギルドに入りたいのは?

「はい、このギルドに入れてください」

「……そこ、それにしてもおぬしがなにじや？」

「俺はエックス・ブラクシア、こつちは相棒のレイ」

「ルーリー！」

「めいじへおへーーー！ ジャあれつねへじやがおぬしの魔法はこいつたいな
んじゅへーーー！」

「はい、俺の魔法は、氷の滅竜魔法です」

「本物かそりやあーーーーー。」

俺の横にはすぐ近くで騒ぐからびっくりしたじゃないか！！
ツがいた

「お前！竜に育てられたのか！」

ଶ୍ରୀମଦ୍ଭଗବତ

「どんな竜だつたんだよー教えてくれーー」

凄い質問攻めだな、オイ！！

「オウ、俺の父さんは、氷竜工ターナル…氷の竜だ」

「お前のところの竜の消えた日も、777年7月7日か？」

「ああ、そうだ…ん？お前もって事はお前のところも？」

「オウ、イグニールは777年7月7日に消えたんだ」

「そうか……」

俺はその時見た、その話を暗い顔で話しているナツの姿が、些細な希望を待っていたナツの顔が

「まあこの話は終わりだ！俺と勝負しろーー！」

「おこおこ、ここのから戦闘狂かーー！」

「なんでだ？」

「同じ滅竜魔導師だからだよーー！」
ドラゴンスレイヤー

「はあ、わかつたやつてやるよ」

「おひしゃーー燃えてきたアアアーーー！」

そうナツが叫ぶと、みんなが盛り上がり、特設ステージに移動された

「それでは、初めーー！」

「俺もだ、じっちゃん

「俺はいいですよ、マスター」

「さて、エックス、ナツ、両者準備はいいか？」

その言葉と同時に俺は走り始めた…しかし

「おらあー！くらえーーー火竜の……鉤爪！」

「…クツ！？ならば！火竜の波動！…」

ズドオオオオオオオオオオン

俺とナツの魔法がぶつかり爆発した

「火竜の咆哮！…」

「間に合えーー！俺の望みは、どんなものも守る障壁の！」とセフォース！

そう叫び三角状のものを手に持ちこじり膨ふ

「絶対障壁！…ディフェンスフォース！」

キィイイイン

俺はナツの魔法を立てて打ち消した

すると

「次で決めてやる…火竜の

「俺もだ、氷竜の

「

俺とナツは咆哮のエネルギーを次の瞬間放出した

「　　咆哮！！！！！」

ズゴオオオオオオオオオオオオ

という雜音が立ち砂煙で回りがつつまれる
そして砂煙が晴れると

「ま、まけたあ」

そうナツがいい俺が

「勝つたぞおー！」

と叫ぶすると周りが

『　　オオオオオオオオオオオオオオ』　　

と叫ぶ
そして

「勝者、エックス！！！」

と判定を下した

そこで俺は決闘が終わると思っていた
しかし

「なぜこうなった

俺はその後すぐにエルザ、ミラ、ラクサスに囲まれ、決闘することになった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4669z/>

FAIRYTAIL～氷の滅竜魔導師～改訂版

2011年12月16日21時55分発行